

日時：2011年2月25日（金）13：30～14：30

会場：関西外国語大学 中宮キャンパス 本館・多目的ルーム

私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会 講演会

「河川の船曳歌とその風景—日本・中国・韓国をめぐる—」

眞鍋昌弘先生の略歴を紹介後、講演会が行われた。

講演では、東アジア（日本・中国・韓国）における民謡の比較研究として「船曳歌」を取り上げた。なかでも船曳歌がうたわれていた風景を辿りながら、歌詞や音楽はもちろんのこと、どんな時にどんな歌を歌っているのか、つまり「うた」の機能を考えることに重点を置いた発表であった。

船曳歌とは、流れに逆らって船を運ぶ船曳人夫が発した労働歌謡であり、作業を行う際の掛け声のことである。掛け声が歌謡になるのかと専門家の間でも意見がわかれており、眞鍋氏自身不思議な分野だと前置きした上で、掛け声だけでなく号令や祈りなども研究されるべきとの考えを示した。それは研究をすすめる中で、船曳における掛け声が、身体から沸き起こる生命力によって発せられるものであり、民俗文化論としては氣息霊、発汗霊としての性格をもつ歌謡群に位置付けられる民謡の原点であると強く感じたからであろう。船曳歌のように難解な歌詞を解明することは歌謡研究の中でも例をみない調査であるようだが、歌詞の構造を知ることは歌った人達が残した重要な文化・歴史を知ることにつながる。比較研究をしていく上では大変重要であると感じた。

1. 中国における船曳歌

中国では今もなお各地に船曳歌が残っているという。竹添井井『棧雲峡雨日記』には巫峡を遡っていく船の様子が記されており、当時の船曳きの苦難を伝えている。イザベラ・バード『中国長江紀行』（金坂清則訳『中国輿地紀行』）では、掛け声と共に舟を漕ぎ続ける男達の姿が記されている。当時の歌を聴くことはできないが船曳の様子を、清朝末期あたりから風景として捉えることができる。

眞鍋氏は船曳文化を知るため、重慶において川江号子の実地調査を行っている。講演では実地調査で得た川江号子の歌声を聞くことができた。緩やかな場所では歌詞や音楽も緩やかに、難所では力強くなる船曳歌は、結束を固める掛け声であると共に、一つの物語のような印象も受けた。

また、船曳を風景として捉える上で重要なものとして「古棧道」を挙げた。河川と並行して作られた古棧道は、船曳や船曳歌の背景を立体的風景として捉えることができる。古棧道を記した写真は当時を伝えると同時に、作業の過酷さや、恐怖を伝える貴重な要素であると感じた。

2. 日本における船曳歌

現在では残念ながらうたわれていないかもしれないとのことだが、日本にも船曳歌があったという。日本の船曳歌がうたわれた風景として、多摩川の川岸、天竜川を遡る川船、熊野川に注目した。これら地域では船曳の描写や川船の文化を伝える文献が残されており、日本における船曳歌を研究する上で重要であることがわかる。

調査を続ける中で眞鍋氏は、室町時代の流行歌を集めた『閑吟集』に船曳歌と想定される歌謡が見られることに気づく。『閑吟集』65番は、淀川の舟、桂川の鵜飼舟と川筋の舟を歌ったものである。江戸時代初期の石曳歌に見える掛け声「えい」と通ずる「えん」という掛け声がうたわれていること、前に配列されている64番の小歌では宇治川が歌われており、淀川、桂川を歌った65番へと続くことから、室町時代における船曳歌として生まれた歌、淀川を遡る船曳歌ではないかとの考えを示した。

3. 韓国における船曳歌

韓国における船曳歌は任東権『韓国民謡集』、金畿鉉・権五慶著『嶺南の歌』などに見える。講演では亀尾市・高牙、礼江、二里、江亭地方の川船曳歌を聴くことができた。気をつける、崖先だ、岩の裂け目だなど作業における注意を促す歌詞と、日が西山に落ちるぞ、日が越えて行くよ、というような情景を織り交ぜた歌詞が、軽快な囃子と共にうたわれる船曳歌は、中国のものとは違った印象であった。